

氏名(本籍)	清 ^し 水 ^{みず} 洋 ^{ひろ} 貴 ^き (埼玉県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第4521号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	観念と実体 －ライプニッツ哲学の生成論的研究－

主査	筑波大学教授	博士(文学)	谷川多佳子
副査	筑波大学教授		竹村喜一郎
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	桑原直己
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	高尾由子

論文の内容の要旨

本論文は、ライプニッツ哲学について「観念」(idée)と「実体」(substance)という二つの軸をたて、まず、「生成論的」(génétique)な探求を行った。問題の連続性と、問題の具体的解決およびその手続きの差異性を明らかにして、最晩年の思想の生成を明らかにするためである。

その主軸となるのが「観念」と「実体」であり、前者は、「観ること」(voir, contempler)、後者は「存在」(être)の問題にかかわる。論文は、「観念」説の検討から始められる。それによって、ライプニッツと同時代の哲学との関連も問題になるが、本論文はライプニッツ哲学の内部に検討範囲を限定した。そこにおける問題点は、「観念」説が「実体」論密接で内的な連関を有することである。

生成論的な観点から、「観念」説と「実体」論という二つの問題系を辿ると、ライプニッツ哲学のつぎのような経緯と変遷が明らかになる。つまり、「観念」あるいは「概念」を理論的な核とする「実体」論から、「統一」、「形相」、「力」を理論的な核とする「実体」論への移行である。前者の「実体」論は、とりわけ『形而上学叙説』(一六八六年)のなかに見出され、後者のほうは、『アルノー宛書簡』を移行期として、ライプニッツの後期あるいは晩期の著作である『新たな説』(一六九五年)および、『モノドロジー』(一七一四年)や『理性に基づく自然と恩寵の原理』(一七一四年)に見出される。以下、論文の具体的内容を整理していく。順番として初期のテキスト群から検討が始められる。

まず、「観念」あるいは「概念」とは何か、それはどのような役割を担っているか、である(第一章および第二章)。次に、観念あるいは概念はどのように「実体」論の理論的な核となっているのか(第三章および第四章)。また、「認識」や「定義」の理論的役割を検討して、「観念」説と「実体」論の範囲が画定される。以上は初期のいくつかのテキストと『形而上学叙説』にもとづく。

つぎに、『形而上学叙説』の「実体」論から、『アルノー宛書簡』をへての、新しい「実体」論への変化をみていく(第五章)。ここでの変化の延長線上に、後期の新たな「実体」論が見出されるのである(第九章および第十章)。

こうした過程で、「実体」論が組み立てていくものが、初期の「観念」や「概念」から、後期の「統一」

や「形相」,「力」へと移されているのがわかる。こうした道筋は、次のことがらへ導かれる。「実体」あるいは「実在」を取り巻いている存在論的な環境であり、「理由」の連関として見出されるこうした環境である（第六章および第七章）。

このような二つの「実体」論は、どのように異なるのか。

「概念」を核とする「実体」論における「実体」とは、「神」が「完全に満たされた」仕方では「個体」を観ることの「下に立つもの」である。それは、「個のアイデア」の形而上学に属し、それに基づいている。これに対して、後期の「実体」論は、「実体」あるいは「実在」の「本質」や「本性」を何らかの仕方では掴み出すことが実体論の構築にとって不可欠となる。「本質」や「本性」を掴む、といういっそう大きな営みの成果として、後期の「実体」論すなわち「モノド」論は形成されていく。「本質」は、それが「被造物」の母胎である、というように（第七章）。さらに、「実体」の「本性」は、「動力学」の成立にともなった、「自然」という領野の制定に依拠している（第九章および第十章）。つまり、「実体」論は、神が有する「観念」あるいは「概念」の下に立つ「個体的実体」から、「形相」あるいは「力」を中核とした、「自然」のうちで真なるものとして在る「モノド」へと進展しているのである。

こうした「実体」論の変化をみるにあたって、「実体」論の構築の手續きが問題となる。第五章では、新たな「実体」論の構築の手がかりとなっている「一性」ないし「統一」(unité)の存在性格を、哲学史へと接続させながら解明することが目指されているのであり、哲学史との関連において、根底にある「リアリズム」の問題が追求されている。

初期の『形而上学叙説』から、のちの『人間知性新論』への「定義」(ライブニッツのキー概念のひとつである)論の変化は、絞り込まれた意味におけるリアリズムへの傾斜の奇跡を示し、「実体」論もまた同様である。それはまた、最晩年の『モノドロジー』における「モノド」の意味と、存在論的性格につながっていく。それはまた、「個体」としての実体から、固有名なき「モノド」へと、つながっていく。

今後のさらなる課題としては、リアリズムの地平で、“ens reale”として「実体」論に輪郭を与えていくために、“ens rationis”についての研究が必要となろう。そこには「関係」概念、「時間」、「空間」の問題もかわってくる。また、「形而上学」と「モラル」の関係の解明には、「宗教」や「信仰」にかかわる大きな背景の研究が必要となるであろう。

審 査 の 結 果 の 要 旨

複雑な、またそれゆえに多くの可能性を孕むライブニッツ哲学に、長年取り組み、困難な問題の解明を目指した本論文の成果は高く評価される。とはいえ、「実体」を中心軸として、二分したほうが、問題点がより鮮明になる部分があり、そうした点を審査委員から指摘された。

学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。